

患者と国民

高柳 篤 史

(幸手市 高柳歯科医院)

患者と国民

昨年、リクルート会社を通じて、都内で一般成人女性150名のボランティアを募集し、歯みがき行動に関する調査を行った。ボランティアの約3分の2に当たる94名が「これまでに歯科医院でブラッシング指導を受けたことがある」と回答した。その代表的な指導内容は「歯と歯茎の間に歯ブラシの毛先を軽く当て、小刻みに動かす。」というものであった。そのうち、「指導内容を忠実に守ってブラッシングをしている」と答えたのは約3分の1にあたる30名であった。さらに、それらのボランティアの実際のブラッシング法を調べると、ブラッシング指導を受けていない人と比べて、ややブラッシング時間が長いもの(約2分)、ブラッシング圧や振幅に差が認められず、ブラッシング後のQHIによる磨き残しの評価でも有意差は認められなかった。

この結果からすると、現在、歯科医院で行っているブラッシング指導は実を結んでいないことになる。これらの現状から考えれば、指導方法が悪いというよりは、到底、日常生活には受容できないことを指導していると考えた方が自然なのかもしれない。

これまで、歯科診療所の主な役割は治療であり、患者も苦痛から逃れるために歯科医などの専門家の指導に従った。しかしながら、一旦苦痛から逃れると話は別である。保健指導の内容は日常生活で遵守するにあたって負担がないか、あるいは軽微でなければ受容されない。さらに、予防となると対象は患者ではなく国民である。

日本歯科医師会のホームページでは、1回のブラッシングを10分以上かけて行なうように呼びかけている。また、歯磨剤を使用したブラッシングは長時間のブラッシングができないとの理由から、まず、歯磨剤を使用しないブラッシングを行ない、その後にもう一度歯磨剤を使用して仕上げ磨きをするように推奨している。こんなに煩雑なことがはたして本当に国民生活の中に受け入れられるのだろうか、それとも、今後も歯科医療関係者は患者のコンプライアンスが悪いとでも言い続けるのだろうか。口の奥に位置する3次元的に複雑な形態の歯を、手の感覚をたよりに棒の先についた毛を隅々にまで届かせる技術の習得は困難で習慣として本当に定着しうるのだろうか。フッ化物の効用を犠牲にしてまで、この神業を習得させるために、歯磨剤を使用しないように指導している歯科医院も少なくない。

本来の目的を達成できないばかりか、かえって国民の利益を損なう結果を招かないためにも国民視点での予防に真剣に取り組んでかなければならない。

ミュータント

人の歯垢中には1mg当り一億以上もの細菌があることが知られている。歯垢は歯や歯周組織における有害因子とされ、日常のブラッシングによる清掃だけでなく、近年ではPMTCと言われる専門家による徹底した除去が行われる。

本来、歯垢は常在細菌叢として口腔内に定着することにより、他の病原細菌による感染から宿主

を守る役割を果たしていると考え、歯垢を構成する数百種以上に及ぶ細菌の大部分は齲蝕の直接の原因にはならない。しかしながら極微量ではあるが、齲蝕の原因菌とされるミュータンスレンサ球菌が半ば常在化した形で存在する。歯垢中に僅かに存在する悪玉菌がいなければ、口腔細菌もこれほどまでに駆逐されずに平和な生活が送れたにちがない。

通常、常在細菌は自分自身の存続を図るため、その宿主を傷つけることはない。しかしながらミュータンスレンサ球菌の場合、歯が無くなると口腔内に定着できなくなるにもかかわらず、自分自身の排泄物である酸で歯を破壊する。一体なぜ、ミュータンスレンサ球菌は自分自身の存在を脅かす歯の喪失の原因となる齲蝕を引き起こすのだろうか。ミュータンスレンサ球菌という名は、

ミュータント（突然変異）に由来する。ミュータンスレンサ球菌は常在菌の一種であるレンサ球菌から出現したものと考えられ、この突然変異の出現は、彼ら自身にとっても不本意であったのかも知れない。

転じて、我々人間は地球を宿主とする寄生生物であるということがいえるが、我々は明らかに宿主である地球の破壊を繰り返しながら繁殖を続けている。そして、このまま地球を破壊し続けると、人間自身の存続をも脅かすことは明白である。地球にとって我々人間はミュータントであり、その出現は望まれなかったものかも知れない。はたして、我々人間は地球をいつまで破壊し続けるのだろうか。「悪玉人」として駆除される前に地球との共生を図らなければならない。